

象牙の穴

黒岩重吾



象牙の穴

著 者 黒 岩 重 吾

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社
会社

東京都新宿区矢来町71番地
電話東京(260) 1111(大代)
振 替 東 京 8 0 8 番

印 刷 所 二光印刷株式会社

製 本 所 憲 専 堂 製 本 所

定 価 2 4 0 円

1963年11月20日 印刷

1963年11月25日 発行

乱丁，落丁本は本社又
はお買求めの書店にて
お取替えいたします。

黒 岩 重 吾

象 牙 の 穴

長編 象牙の穴 目次

助教授の外車	七
偽りと誠実	三〇
夢の化学	五四
最後の店	七五
偽りの約束	一〇〇

新しい鉄……………二三

噎れた声……………二四五

雨の鉄梯子……………二六

女の火花……………二九

精神衰弱……………三三

青い石と炎……………三五

狂った魂……………三七

象牙の穴

助教授の外車

一

土曜日の夜、大阪Kホテル四階小宴会場で、ある同窓会が開かれていた。入口の黒い立札には、F高等学校白雲寮同窓会御席と書かれている。これを見ただけでも、今夜の席の人々が旧制高校の出身者で、かつての寮生活へのノスタルジアに溢れた、ささやかなるエリート意識の持主たちであることが分る。

もちろん、彼等は後者を否定するだろう。

が、残念ながら今夜の出席者を見れば、その弁解は否定的であった。三千円という会費のせいでもないだろうが、昭和十八年白雲寮出身関西在住者のうち、集った者は半数であり、彼等はそれぞれの社会

で、かなりの地位を得ている者ばかりである。

四十前という年齢のせいもあり、飛び抜けた出世者はいなかったが、一流会社で課長、二流会社で部長というのが、最も多かった。

関西方面の勤務者ばかりなので、本省関係の役人は居ない。

会社関係がいいでは、ジャーナリスト、大学助教授、法曹界などだが、私大の同窓会に良くあるように、喫茶店主や、親父の会社をついだ若社長がいないのも、今夜の同窓会の特色であった。

春の夜である。霧に濡れた窓からは、横堀川岸の料亭の灯がにじんで見えた。ホテルの室内の灯は明るく、生活への自信に溢れた人々の、ほんのりと赫らんだ顔を照らしていた。

こんな席の話題は、来ない連中の近況から始まる。誰それは某省の課長で局長候補だとか、あいつは酷くおちぶれ就職を頼みに来たとか、それを聞き喋るのが楽しみで集ったようだ。旧友の噂話と云えば聞えが良いが、底に流れるものは、羨望、嫉妬、

軽蔑、自己満足である。

高校時代はんからをモットーにし深夜帰宅しては、寮雨ばかり降らせていた者が、鼈甲眼鏡の謹厳な紳士に変わっているかと思えば、がり勉と軽蔑されていた男が、新地のバー街で敏腕をうたわれているなど、旧友の変貌を見るところにも、面白さのいったんがある。

話題は旧友の噂話から収入に移ったようだ。これは、どの学校の同窓会でも変りはない。お前の会社は景気が良いから凄いだろう、とか、重役になってもサラリーマンはだめだ、儲けようと思えば商売だよ、など、元気の良い声の中にも、何処か吐息が交るようであった。

その時、一人の男が、みな談笑に背をむけ、一人つくねんとウイスキーを飲んでいる男に声をかけた。

「雨森君、あなたさっき、自分で車を運転して来ていたね、あれは確かジャガーだったんじゃないかな……新車らしいが……」

尋ねたのはN製菓の企画部長殿村であった。雨森と呼ばれた男は色黒く頬骨がとがり顎は細く、どう見ても貫禄のある顔ではない。黒い眼鏡をかけているからまだ救われているが、眼鏡がなかったら貧相な顔に属する。

みな眼が一斉に雨森に注がれた。雨森の存在に初めて気付いた様子である。

「ああ、そうです」

と雨森が答えた。何んとなく陰気な声であった。ほう、という感嘆が一部から出た。自家用車を持つことなど、今時珍しくはないが、ジャガーぐらいの車となると、重役になっても、サラリーマンあがりじゃ、一寸持てそうにもない。

企画部長は一寸眼をぱちくりした。この表情はこの席の殆どの者の気持を現わしていた。

雨森は学生時代、同学年の寮生から余り好かれていなかった。がり勉組の筆頭だったからである。田舎の中学を出、ただ勉強するためにだけ高等学校に入って来たような男であった。しかもそれを、田舎

くさい顔や態度すべてに現わしたのである。

旧制高校において尊敬されたのは、遊び廻っていて、良い成績を取る連中である。彼等は頭が良い、と絶對的な尊敬を受け、がり勉組は、どんなに良い成績を取っても、無視された。

とくに雨森は喋り方も鈍重で、才氣煥発な連中とはもとより、運動部やなまけものグループからも軽蔑されていた。

なかには内心、雨森のがり勉を畏怖をもって眺めていた者もないではない。が、そんな者も、それを決して口には出さなかった。ひよっとすると、声をかけた殿村企画部長は、かつて雨森を畏怖していた一人かもしれない。

「確か雨森さんは大京大学に残られたようでしたね、じゃ、今は大京大学で教えているわけですね」
殿村企画部長は言葉を改めた。その時、雨森の現在の地位を決定的にした小事件が起きた。

みなが心待ちにしていた今夜の会のまとめ役、大須賀が、やあ遅くなりまして、と春夜なのに汗を拭き

拭き入って来たのである。大須賀は高校時代柔道三段で、T大に入ってから全日本学生柔道大会で二位になり、私大柔道部に絶えず押えられていた官立大柔道部員の溜飲を下げさせた一種の英雄であった。頭も悪くはなく、弁論もたち、白雲寮では一方の旗頭であった。

しかも現在は三十九歳で資本金七十億、化学会社中の名門、大村化学の第二営業部長という要職にあった。出世頭の一人である。

その大須賀が、部屋に入るや一座を見廻し、つかつかと雨森の傍に歩みよったのである。

「雨森先生、どうも御無沙汰しちゃって、うちの連中が厄介になってます」

大須賀がこの席で、かつての学友に発した、先生という言葉には、からかいや軽蔑の響はみじんもなかった。そう呼ぶべき人に呼んだような語調であった。「いいえ、こちらこそ……」

と雨森は言葉少なく頭を下げたが、一段下っていたのは明らかに大須賀の方であった。

雨森が現在、大京大学工学部合成化学教室の助教
授であることが、今夜の会の人々に再認識されたの
は、この時である。

先ず極東ナイロン総務次長の高木が席を立ち、雨
森に名刺を渡したのをきっかけに、五六人の者が次
次と、初めて会ったように挨拶した。

何れも実業界の連中ばかりである。

「なんだい、ありや……」

あきれたように呟いたのは、B新聞社会部デスク
の遠藤であった。彼の横にいたのは、E新聞学芸部
次長の堀田である。

「まるで殿様の御機嫌うかがいだね、折角の雰囲気
も台なしだな、それにしても、大須賀のやつも変れ
ば変わったものだ」

と堀田は不快そうに云った。

「そりやそうだよ、三十九歳で大村化学の営業部長
だぜ、柔道と弁論だけで、あの地位にはのほれまい」
二人はなんとなく溜息をついた。学生時代の英雄
は、俗物の英雄であったわけだ。二人は苦いものを

飲み潰したような顔になった。

「俺は詳しいことは知らんのだが、工学部の合成化
学の助教授というのはいしたもんなだね、ジャ
ガーを乗り廻すなんて、いったい、どんなアルバイ
ト口があるんだい？」

と遠藤が堀田に尋ねた。この疑問は当然である。

ジャーナリストにもてはやされている著名教授なら
とも角、工学部の無名の一助教授が、高級外車を買
える程のアルバイト口があるとは、考えられない。

学芸部次長は眉をしかめた。

「僕も学芸部は浅いので、はっきりしたことは知ら
ないが、アルバイト口の有る無しは置くとして、合
成化学教室というものが、工学部のなかでも花形で
あることは、事実のようだね、吾々のような一般紙
の学芸欄には余り用はないが、専門紙では絶えず取
り上げているようだな、大京大学では、相川勇介と
いう教授が有名だよ、雨森先生は、その弟子だろ
う……」

社会部デスクが、更に質問したような顔をしてい

るのを見て、学芸部次長は苦笑した。

「君は警察廻り専門のデスクらしいね、しかしデスクとなれば、浅くともこの世の現象は広く知っておく必要があるぜ、と云ったって、僕も大きなことは云えないんだが、今はやりの石油化学というやつ、あれが合成化学に入るらしい……」

「分った、プラスチックとか、ポリエチレンとかいうやつだな、そうだ、二三日前の、うちの経済欄に、夢の繊維とか何とか、まるで映画の題のような見出しが出ていたが、そいつだ……」

遠藤社会部デスクが、とん狂な声を出した。その時、関西通商局産業開発課長轟剛平が立ち上った。学生時代開拓班という右翼じみたサークルに居た轟は、昔におとらず、大きな声で怒鳴った。

「諸君、懐しのF高校白雲寮寮歌……さあ、いこう……」

割れるような拍手が起り、中年に入りかけた社会の中堅たちは、子供のように瞳を輝かせ、限り果てなき大空で……と手拍子をうちながら歌い出したの

である。

が、会場を埋めた、過ぎ去りしものへの、感傷と感激の渦に、背を向けている者が一人居た。

雨森茂高である。彼は思い出したように手拍子を打ったが、視線はいらいらと入口に幾度も注がれた。明らかに待ち人がある様子であった。

二

弁護士萩原誠が、白雲寮で一時、同室だった雨森茂高から、自分も出席するから、このたびの同窓会に是非出席して欲しい、帰途、久しぶりに話をしたい、という速達の手紙を受け取ったのは、会が開かれる日の四日前であった。

こんなところにも、雨森の慎重な性格がうかがえ、相変らずだな、と萩原は苦笑した。

F高時代、もし雨森に友達らしきものがあつたとすると、それは萩原であつた。

萩原は文科であるし理科の雨森とはクラスが違

う。が、萩原が雨森と割合口をきいたのは、たんに一時同室だった、という理由だけではない。当時文学青年だった萩原は、厭世感にとられ幾度か自殺を考えたことがあった。戦時中でもあり、軍国主義の時流についていけなかったこともある。

そんなせいか、萩原にも友人が少なかった。彼は、片手でカントの名句に感激し、酔い痴れては同じ口で天下国家を論ずる学友たちの仲間に素直に入って行けなかったのである。

そんな萩原に取って、学友や、時代や、青春の悩みからも超然とし、ただがり勉に余念のない雨森の存在は驚異であった。厭世感、厭人感にとらわれている萩原には、雨森がふと超人のように思える時があったのである。

つまり萩原は、雨森と一言、二言、話している時だけ悩みが遠のくように感じたのであった。自分の悩みが、第三者が見るように馬鹿々々しく、滑稽に眺められるのだ。

そうかと云って、雨森と十分も話をしておれば、

話題の種がつき、腹が立って来る。

だから、萩原は雨森と話す場合はせいぜい数分までで停めた。

当時の二人の会話の一例をあげれば、次のようなものであった。

「またがり勉か、良く根が続くね、君は超人だよ、恐れいった……」

「だって、僕たちは勉強するために高等学校に來ているんだろう？」

雨森は不思議そうな顔で専門書から眼を離し、萩原を眺める。

「そりやそうだけど、俺たちは中学生じゃないんだぜ、人間があることへの疑問、戦うことへの疑問、君が勉強している学問への疑問、何故？ この何故？ という言葉を探究するのが、高校での勉強の一つだぜ……」

雨森は首をかしげる。そしてすまなそうに、「僕の何故？ はこの本の中にあるんだがな……」萩原は馬鹿らしくなって、議論を打ち切る、とい

うのが常であった。

萩原は、大学は文科に入る積りだったが、父のたっての願いもあり法科を選んだ。兵隊に取られ、南方から復員したのは、昭和二十二年であった。

復学し昭和二十四年K大卒、卒業と同時に司法試験に合格した。一時は関西法曹界の重鎮大塚法律事務所勤務したが、その後独立し、現在に到っている。ただ、弁護士としては余り名を知られていない。

依頼人に対して好悪の感情を強く抱き過ぎるためかもしれない。萩原は職業人としてよりも、余りにも人間臭過ぎた。

萩原は十年振りのF高校の同窓会には、出たくなかった。F高校のクラスメートで、弁護士になった者は萩原がいかに二人いるが、二人とも、若手弁護士として脚光を浴びている。

そのうちの一人の飯田は一流商社であるMO商事の不正輸出事件の弁論陣に加わっている。弁護士にとって、このような大会社の弁論をするということ

は、名実共に、一流弁護士として認められることだ。

飯田も同窓会に出席するだろう。小さな事件の調査で時間をくったせいもあるが、萩原は行こうか、行くまいか、でかなり迷った。

萩原がKホテルに到着したのは、八時半であった。クラス会は、六時から八時半となっている。最後に一寸顔だけ出し、久し振りで雨森と、静かなバーでも飲もうと思ったのだ。

会場では寮歌の合唱がずっと続いていた。白雲寮歌から始まり、一高、三高、北大予科寮歌とつきるところを知らない。眼鏡をかけた営業主任が注意したら良いものかどうか、腕時計を見ながら会場の前の廊下をうろうろしていた。

萩原が会場のある四階エレベーターを下りた時、正面の小ロビーに坐っていたのは、雨森と、大村化学第二営業部長の大須賀であった。

会を抜け出て密談していたらしい。雨森がこちらを向いた。この時萩原は、雨森の顔に暗い微笑が浮

いているのを見た。

「よう萩原君じゃないか、もう来ないのかと思つて、雨森先生と君のことを心配していたんだよ、ただし、君が現われたのは、僕にとつては残念だがね、はっはっは……」

大須賀は大きく哄笑した。萩原は、大須賀が絶えず同級生の動静を探っているのを知っている。今夜のクラス会の発案も大須賀であつた。おそらく大須賀は、萩原がやらない弁護士であることを知っているに違いない。

「どうして……」と萩原は尋ねた。

「いや、会が終つてから、雨森先生を二次会に引張つて行こうと思つて口説いていたんだよ、雨森先生は、あんたと先約があると、僕の誘いを受けないんで……」

大須賀はまた哄笑した。雨森が立ち上つた。

「大須賀さん、今夜はこれで失礼します」

雨森は萩原を見た。その視線は、このまま出ないか、と云っているようであつた。

萩原は迷つた。ここまで来て、会に出ないで雨森と立ち去れば、旧友たちにどんな感情を与えるかは、想像に難くない。欠席ならばなんとも云い訳がたつ。が、米たのを大須賀は知っているのだ。

耳を澄まさないでも、寮歌の合唱は響いて来る。

席が今、どんな状態にあるかは容易に想像出来る。

そんな状態の中へ、今頃のこのこと顔を出した時の、恰好のつかない自分の姿は、考えるだけでもやり切れなかつた。

俺はこの年になって、まだ昔の性格が残っている、俺が三流弁護士でいるのも、そのためではないか。

つまり萩原誠は、社会に出てからも、自分自身の感情と性格を、酷く貴重に扱つて来たのであつた。

「おいおい、一寸会に顔を出したらどうだい、皆、聞いたら怒るぜ、おい、萩原君……」

大須賀は学生時代のような声を出して、エレベーターの前に立つた萩原に呼びかけた。

「皆さんよろしく云つてくれないか、実は一刻を

争う用事があるんだよ、雨森君と飲みに行くなんて、とんでもない……」

エレベーターの中で雨森は無言であった。昔からそうだ、余分なことは喋らない男である。ホテルの一階はひっそりしていた。KホテルはGホテルのように華やかではない。廊下のはずれやロビーの隅に何処か空ろな翳りが漂っている程、静かであった。観光の季節に間があるためか、ロビーのソファに坐っている外人の姿も少ない。ボーイがうやうやしくドアを開けた。

雨森は、萩原を玄関に待たせ、車を運転して来た。萩原は啞然とした。ジャガーということは分らなかったが、彼にも良い外車であるのは分った。薄いルームライトの中で、度の強い眼鏡を光らせている貧相な顔の大学助教授を見た時、萩原はなんとなく不似合なものを感じた。それは、四灯式ヘッドランプ、流れるようなスマートなボディの中でハンドルを握る男の顔ではなかったからだ。

もし雨森の代りに虫の好かない著名商業デザイナー

ーが坐っていたら。弁護依頼をこわった某ナイトクラブの経営者がハンドルを握っていたら……萩原はかつての依頼人であった二人の顔を思い浮かべ、ほっと溜息をついた。

その二人なら、違和感がなさそうであったからである。すると雨森が云った。

「やはりイギリスの車は、シックで落着くでしょう」

「豪勢ですな」と萩原は答えた。

「家内が買ってくれ、としきりにねだるものですから……」

「奥さんお元気？」

「有難う、今夜君に会ったら、是非連れて来て欲しいと、頼まれましたよ、そうそう、何時ぞやは家内のことで、ほんとに世話になりました」

雨森は車を走らせ始めた。何処へ行くのか、と萩原は尋ねなかった。雨森があんな速達を寄越したのは、たんに懐旧の情にかられたためではない。雨森にそんなセンチな面があると、萩原は思っていな